

JLC 第72回研究発表会

2019年3月16日 日本近代文学館

In the Labyrinth of NIHONGO

今井 真由美



(撮影=小澤正樹)

I. はじめに

JLCに入れていただいて早や5年半。私なんかメンバーでいいのだろうかと思ながらも、楽しいのと参加費を払うだけでも・・・という言葉を支えに、参加させていただいて来ました。ここでは皆様の発表をただ聞かせていただくだけ、笑うだけ・・・それも笑いの「ツボ」がわからずお追従笑い(汗)・・・の私に、まさか発表が回って来るなんて・・・とこの数か月緊張で夜も眠れず昼寝をする日々が続きました。今日は私がPCに貯めていたいろんな実例をお話したいと思います。

私は18年ほど英語を媒介語として日本語をお教えする日本語教師を続けています。生徒は企業の役員や大使館員やその家族。駐在期間を利用して短期間で何とか日本語をものにしよう、中には日本語を身に着けてこのまま日本で落ち着こうという志の高い若い生徒さんもいます。対面の個人レッスンなので、生徒の習熟度に合わせて一人

一人と向き合い既習語彙やストラクチャーを徐々に積み上げ日本語に変えていくので、ルー大柴じゃないですが、中間言語で“together しようぜ”みたいなことを毎日繰り返しているわけです。

もちろん素直な方もいますが、多くはプライドも高く頭もいい屁理屈さんで、納得がいくまで質問が来るので、毎日が緊張の攻防戦です。

言語は文化といいますが、思想や文化の根底には母国語に内在する、ものの見方が流れています。毎日日本語を外国語として学ぶ学習者と接していると、彼らの素直な目が日本の素顔を映す鏡のように思われることがあります。思いがけない理解のずれにぶつかる度に母国語の本質的な意味を考えずにはいられず、考えているうちに(私の頭レベルではありますが)思わぬ発見があったりします。間違いや失敗から学ぶことが多いので、今日はそんなお話をしたいと思います。

タイトルの in the Labyrinth of NIHONGO とは、

英語と日本語の狭間の「NIHONGO」——大人の日本人の「日本語」でも幼児の「にほんご」でもない——の中で迷っている学習者と、それに相対してもがいている私（日本人ではない相手と、来る日も来る日も日本語を話している私）という意味です。

II. 連想法 MNEMONIC

語学の勉強と言えば、まず文法と語彙。いくらでも覚えられる若い生徒は問題ないのですが、あまり若くない生徒に日本語の語彙を覚えていただくために、いろいろ工夫しています。

ここにおられる頭脳明晰な英語の達人の皆様方は、英単語が辞書のようにそれこそ大容量のメモリーロードに大量記憶されていて、今もって衰えを知らないと思います。（宮本先生などは辞書を覚えては1ページずつ食べたと伺っています）。

なんとか英語をモノにしたいと思った私達とは異なり、多くの駐在員の方は日本に居ても英語だけで生活できる恵まれた環境の中において、最初の学習動機の多くは、せいぜい滞在期間を楽しく過ごすためとか、趣味と教養です。あるいは「日本語を勉強している姿勢を部下に見せる為」とか「仕事でちょっとした決め台詞が言えればいい」ぐらいの動機からスタートします。Motivation が高い生徒が居ても、実際は仕事に忙殺されて日本語学習は後回しと言うことになりがちです。

そこで、興味をもって覚えていただくためにはこちらにも工夫が必要です。その一つが連想法 mnemonic です。つまり、語呂合わせ・ダジャレです。その昔、団体旅行で税関を通るときに「斎藤寝具店 (sightseeing)」と言った逆バージョンです。例えば私たちのグループ(木谷メソッド Japanese) で使っているものに「Get's the Car Sue Making Doughnuts.」(曜日の名前)とか、 Die !

Joe ! Boo ! (だいじょうぶ) とかがあるのですが、実は結構これが効果的です。

国立劇場の裏に住んでいたけれどタクシーに乗っても家にたどり着けなかった dyslexia (識字障害) の生徒さんが、Coke/ Rits /GENKI /Joe! と言ったら一発で家に帰れたということもありました。

他に、My wife asks, "Can I, can I, can I?"(家内)、My wife is too much.(妻)。ため息をつきながら、My age makes me sigh. (~歳)、A gentleman is sincere. (紳士)。それからちょっと声を潜めて He meets me. (秘密) とか。

Eat a duck and a mouse (いただきます!) もギョギョっと面白いですし、オージー風に Monday night is no problem. (問題ない) と言ってみたり、生徒が語彙で躓くたびに mnemonic のヒントを出して、思い出していただくわけです。

いつもグループの皆さんで「何か面白い mnemonic がないか」と知恵を出しあって考えています。いい物・クルシイ物を取り交ぜて、グループで400ぐらいの連想法のストックがありますが、何かいい連想法がありましたら是非！ 只今、絶賛募集中ですので、皆様よろしく願いいたします。

最後に「ツマラナイ」この mnemonic で何かいいのがあるでしょうか？ と皆様にお伺いしましたところ、後日早速、服部会員から<上述の mnemonic で、すでに妻 = too much の語彙が定着しているという前提で>「ツマラナイ (too much laugh night 妻が大笑いする夜)、(too much rough night 妻が荒れた夜)、tomb all a night (墓で一晩)、tomb Arab night (墓でアラビアンナイト) の組み合わせなどいかがでしょうか？」を頂きました。ありがとうございました。

Ⅲ. 学習者のまちがい

レッスン中の学習者の間違いで大笑いすること数知れず……。いつもは立派な方が真面目な顔で間違われるのがあまりにおかしくて、レッスン後エレベーターに乗る前にトイレや給湯室中に入って笑いをかみ殺すこともあります。

言語能力というのは人間のあらゆる知識の総和の上に築かれるものですので、この面白さと言うのは、普段の高い教養と比べて日本語知識の圧倒的欠如のアンバランスによって引き起こされるから面白いのです。決して学習者をバカにしているわけではないことを申し上げておきます。

少し例を挙げてみましょう。

間違いの原因としては ①単純な言い間違い ②うろ覚え ③音の間違い (音声/拍/ アクセント) ④文法の問題 ⑤カナの問題 が考えられます。

* 「Kentucky ございます。」?? → 「おはようございます」を「オハイオございます」と覚えていた。—②

* 「入ってください。触って (SAWAT-TE) ください」→SUWAT-TE KUDASAI の間違い —③

* KONO- bus-WA SHIBUYA-NI IK-I-MASUKA?
!!! —① このバスは渋谷に行きますか?

間違わないでねという、余計に意識して間違うことがあります。例えば、OKANJO と KANOJO。

* 「KANOJO をください。いくらですか？」→OKANJO をください。—②

* はんたい [hantai] ですが、アメリカ人の生徒には [hæntai] にならないように発音に注意してねというのですが、会議で「私は反対です」を「わたしは 変態です!」と言ってしまった。—③

果ては「はんたい」と「へんたい」と「たいへん」がみんな入り混じってしまって「大変です!」が「変態です!!」—なんてことにもなっちゃっ

て・・・本当にたいへんなことになってしまいます —②

* 「図々しくなりましたね!」と言われてえ?!! と思ったら、「涼しくなりましたね」だったり。 —③

* 私が 5 分レッスンに遅れて到着したら、「しっばいしたんです」と言われ、やはり外国人はずいぶんはっきり言うなと思ったら、「心配したんです」のつもりだったこともありました —②③

* 「彼は色気ちがいです」?!! →これは色違いです。

* ウニ= sea urchin ウニと urchin が一緒になってしまって、すし屋で「ウXXを下さい!」とか、「わたしの家 (うxち) は大きいですよ」と、大真面目におっしゃったり・・・。

* 「泥棒です。火事です。たすかります! (たすけてくださいの間違い)」—④

(関連動詞) 英語ではせいぜい lie と lay ぐらいですが、日本語には異形の自動詞・他動詞(関連動詞)が多いのも混乱の一因です。

また自分が catch できる単語を勝手に組み合わせで間違っ理解していることもあります。「エスカレーターでは手すりにおつかまりください。」のアナウンスを、長い間ずっと「スリをつかまえてください。」と言っていると思っていた生徒。敬語の聞き取りレッスンで、はじめて「え～そうだったの?!」と。(日本ってスリが多いのかと思っていたそうです) —③

* 日本に来てから2年間多忙故に日本語を全く習わないで過ごしていた某有名会社の社長さんは、初めての日本語レッスン1時間目で、「ですか?/ですね?」をお教えした途端、「あ～～!!!!」と大きな声。isn't it? (ですね～) を2年間ずっと「ディズニー」だと思っていたそうです。—③

* 「この席は空いていますか?」「明日空いていますか?」と習った生徒が、早速「イブはあいていますか?」と聞いて、とっても失礼な外人だと思われたり、(空いて vs 相手) —③

* カタカナを初めて読めるようになった製薬会社の社長さんが「クスリの反対はリスクなんですね。日本語は素晴らしい!!」と勝手に感激してくれたり・・・

* 「もう」=additional と「もっと」=more は生徒にとって間違いやすく、「もう一杯ください」を「もっと一杯ください」と間違える生徒が多いのですが、「いっぱい」の「い」を→「お」と発話しちゃって大変なことに・・・—②③

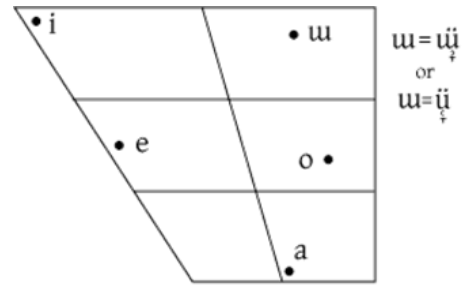
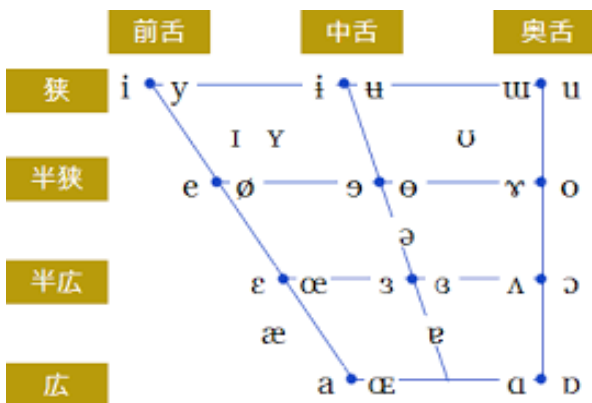
* 助詞の「で」と「に」も間違い易いのですが、「どこにすんでいるんですか?」を「どこでしんでいるんですか?」と言ってしまったり・・・—④⑤

さて、次にどうしてこんな間違いがおこるのか考えてみましょう。

IV. 間違いの背景

1. 音声の問題

(1) **母音の問題** 英語では26ぐらい? 日本語は5つ(最初が英語、次が日本語)



図でわかるように、日本語と英語で発話時の舌の位置・口の形が、微妙に違います。

ex) 「あ」日本語 [a] だが、英語では「ʌ」「æ」「ɑ」「a」「ə」の5つ。

アメリカ人の「反対」が「変態」になったり、「座って」が「触って」に、「住んでいる」が「死んでいる」に聞こえたりするのは、ここに問題があるわけです。

(2) 拍の感覚(モーラ)が違う 英語では音節(シラブル)

日本語では、かな文字一つが一拍です。拗音(キャ キュ キョ)、促音(っ)、撥音(ん)、また、長音(ー)も一拍と数えます。例えば日本語で「ストライク」も「ストレート」も5拍ですが、英語ではどちらも strike、straight、とたった1シラブルです。「アイスクリーム(ice cream)」を7拍ととらえられる外国人はめったにいないのです。

また同じ母音が連続する言葉も発話しにくいので、ところどころ→「トクルドクル」、花咲じい HANASAKA →「ハヌスク」、じい→「ジージ」となってしまいます。

日本語は拍と母音の均一性の上に築かれている言葉ですので、日本語を初めて聞いた人にはポツポツと雨音みたいな言語に聞こえるようです。

☆長音 十分に1拍とらないと 間違った言葉になってしまいます。例えば、「ここ」と「高校」、「主人」と「囚人」、(どっちも同じだったりして・・・)「病院」と「美容院」、「女性」と「情

勢]、「処女」と「少女」、「顧問」と「肛門」、「組織」と「葬式」。「あなたのソウシキは スバラシイデスネ??!」。「涼しい」と「図々」しい、「おばあさん」と「おばさん」、「おじいさん」と「おじさん」

(ここで 岡本会員から長音を長く発話させるだけではだめでしょう? とさすがの鋭い質問がありました!) 全くその通りで ここは「主人」の方は短いと覚えただけでは不十分です。

「主」を短く発話したら、釣られて「人」の方も短くなってしまいがちなので、「主」は1拍、「人」はしっかり2拍取って発話しなければ、正しく聞こえない。つまり語の中あるいは文の中の相対的な拍の感覚を身につけることが大事なのです。

しゅ・じ・ん は しゅ・う・じ・ん のように、「ん」を独立した1拍として発話しなければならないのです。

それが 次の「撥音」「ん」の問題になります。

☆撥音「ん」 上で述べたように 外国人にとっては独立した1拍を感じられない音です。ですから「今晚」をコバンとかコーバン、「女」をオナと発話しがちです。「コニチハ!」と元気に言ってくる外国人のなんと多いことかは、皆様もよく感じられると思います。

☆促音 (詰まる音) もまた拍を感じるのが難しいのです。一番困るのは、この種の間違いが非常に基本的な動詞の活用に食いこんでいることです。

例えば、行ってください/居てください (大違いですね)、来てください/切ってください/聞いてください、取っても/通っても/とても、変えた/帰った、・・・ですからトツテモ大変です。

2. かなの問題

(1) 単純な読み間違い 子供がbとdをまちがうようなもの

ひらがなの「さ」と「ち」、カタカナでは「シ」

「ツ」「ン」「ソ」「リ」「ユ」「コ」「ル」と「ラ」の読み間違いが多いです。

例えば、ツアーサラダ、クソームスープ (美味しくなさそう・・・)、アノレミホイルなど、面白い変な日本語の例をご覧ください。



「ソ」と「ン」、「ら」と「ち」



ひらがなの「う」とカタカナの「ラ」

(2) カタカナの問題

カタカナは外来語を日本語で表記するときに使いますが、元の発音と一致しないという問題があります。こちらとしては「カタカナが読めるようになる」とメニューやスーパーの商品や看板などが読めるようになるからね!」と励まして覚えて頂くわけですが、カタカナ語には単純に類推できるものもあるが、多くは発音と一致しなくて生徒をがっかりさせることがあります。

初めて手に取って読んだカタカナが、机の上のいわゆるマジック (しかも ホワイトマジック = white/felt pen) で・・・がんばってカタカナ読めたのにこれ何?! と言われたことがあります。マクドナルドもしかり。せっかく読んでも「何これ?」ってことになってしまいます

ね。

英語に近いカタカナ表記にすると、アルバムは album [ˈælbəm] 「オバマ」で、「ホット」は [ハット] でしょう。毎日短い日本語クイズを送って答えを email してもらっているのですが、感心にも日本語で答えをメールしてきた生徒がいました。そこには「今井さん、わたしのエロをなおしてください」と。ギョッとしたのですが、「error エラー」のことだったんですね。

また日本語のローマ字表記の問題（ルールがいい加減で発音通りではない）もあります。

「TOKYO」と「KYOTO」には、どちらも「O」が二つありますが、「トー/キョー」の「O」は両方長音 [O:] で、「キョー/ト」の「O」は初めだけが長音 [O:] です。

デパートの「TOKYU」の「O」は「トーキュー」と長音 [O:] だけれど、「SOGO」の二つの「O」は、最初が [O] で二つ目が [O:] です。いやはや全く…といたくなります。

（ここでカタカナの表記やローマ字表記について会員の皆さんから質問や貴重なご指摘が相次ぎ大変勉強になりました。へボン式と訓令式の違い、最近では発音に近い表記に変わってきている etc.

また2次会で小池会員から「YASUDA 倉庫」の表記が最近「YASDA 倉庫」に変わった、との貴重な情報も頂きました）

*日本語では [u] が無声子音の間にあり low tone の場合は無声化する。

3. 母国語の影響

フランス人はあの有名な HERMES (エルメス) で知られているように、“h”を発音しないのでいろいろ困った(面白い)ことが起こります。

*AKUSHU と HAKUSHU

*禿げるとあげる

*花があります vs 穴があります

・…なんてことから、来週出張だからと「援交し

てください」「援交できますか?」と必死で言うて来る生徒や(ただレッスンを変更してくださいだった)、「花束贈呈です。」が「あなたは童貞です」になってしまったり。林先生の「今でしょう?!」のフレーズは、会議でここぞ! という時の「決め台詞に使ってくださいね」と教えていた生徒。ここだ! と思って満を持して発した言葉が「ひまでしょう?!」

日本語は、有声音/無声音(声帯の振動の有無)の違いがありますが、中国語は有気音/無気音(息を強く出すか出さないか)で区別するので、「た」と「だ」の清音と濁音の区別がつきにくいので、「また」と「まだ」、「ダメ」と「ため」を混同します。「まだ駄目です」は「またためです」に。

ちょっと舌足らずに聞こえます。立派な体格の韓国人が、「みっちゅごじゃいます(三つございます)」というのは、大人としてはちょっと可愛すぎますので矯正が必要です。

またスペイン人はYをJと発音するので、「野球(じゃきゅう)を予約(じょやく)」したり、Sの前に[e]音が入りがちで「すき焼き」を「えすき焼き」と言ったりします。でも、スペイン語ではLLの綴りを[ja]と発音し、パエリア(Paella)はホントは「パエジャ」だそうですから、まあおあいこかなと思っています。

4. 文化の違い

お互いの文化の違いで「ちょっとした違和感」を感じる場合があります。

欧米人は愛想がよくお世辞が上手な人が多いです。名前を言うだけで、What's a lovely name! 天気だけでも、Lovely weather! Beautiful day! と。革のスカートをはいて行っただけで、“You are sexy today.”と言われてつい舞い上がってしまいそうになるのですが、彼らにとってはいい天気ぐらいのただの挨拶なんですね。

それに引き換え日本人はあまり褒めないし

Modesty の文化で、自分のことはへりくだります。

「まあまあです (=so so)」と、日本人はかなり自信のある時にも 100%でなければ使いますが、外人の so so はホントに 50%以下のダメの意味。遠慮して「まあまあです」なんて言ったら、とても気の毒がられます。

「I'm good at xxx」=「x x x が上手です」ですが、日本語で「上手」は誉め言葉で自分には使わない。(使うのは子供ぐらいだから) 大人が自分に使う時には、せいぜい「好きです」か「得意な方です」ぐらいに遠慮して言ってね、と教えても本当に自分が上手な時はどう表現すれば伝わるのか？ 実力があるのに何故正直に言わないのかなどとなかなか納得しないこともあり、まあ<このキャラだし>外人だからそれでもいいか、みたいな気にもなってしまいます。

また、日本語では断定する表現を避ける傾向にあります。(この書き方もとても日本語的ですな)できると確信していても、「できます」ではなく「できると思います」とか「そうだと思います」。

日本人の「思います」は≡SURE≡be convinced なんだけど、言い切らないだけ。でもこれを直訳すると I think となり、急に信頼できないあやふやな statement になってしまいます。

フォーマルな場面でよくみられる表現「～たいと思います」に至っては、「～I'd like to xxxx, I think」になるわけですから、「お嬢さんと結婚したいと思います」等は、彼らにとっては「はあ？ 冗談？ 本気なの？」ということになってしまいます。

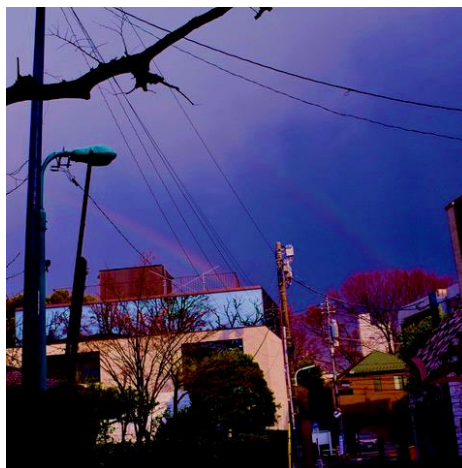
(この後生徒からの面白い質問から気づいたことを考察して締めくくるはずだったのですが、時間切れで終了。)

~~~~~

## V. 最後に

ご立派な先生方や英語の達人の皆様の前で私がこのようなお時間を頂くなるとんでもない話で、もうどうしようかとドキドキでしたが、

皆様が熱心に聞いてくださり、随所での確な質問 (本当にレベルの高い素晴らしい聞き手に恵まれました) が相次ぎ、また貴重な advice を頂いたおかげで話が発展し、思いがけず拙い発表を盛り上げて頂いたことを心から感謝申し上げます。時間が足りなくなり まとめまで行けない中途半端なものになってしまいましたことお許しください。



例会後 駒場公園の東門を出たところで空に大きなダブルレインボーが・・・！ 二つの虹は希望の架け橋みたいに見えてとても幸せな気分になりました。ありがとうございました。

最後におまけ「変な日本語」として集めたスライドから1枚 (外国人の皆さん！ 騙されないで！！)

